

あそ 9
2015



常 念 岳



須賀忠男

呼称 じょうねんだけ

標高 2,857 m

松の花常念白き頂のみ

若楓さやぎ常念岳ゆらぐ

青首大根町筋に干し常念岳雪

常念にまづ礼拝す福寿草

夏燕常念岳の頂で

駒草や常念坊は男山

瀧 春一

瀧 春一

高島 茂

清水 保

須賀 敏子

須賀 敏子

あそ

九 月



春蚓秋蛇

佐藤喜孝

東京

膝に水春になつても膝の水

朝顔や春蚓秋蛇たのしめる

夕立の道に苗插すごとくなり

井の中のしづかな西瓜敗戦日

ポケットがぶるぶるぶるぶる夏野原

行行子空のふかさに抗しをり

おどろいた時に出すこゑ落し文

俳句界では旧漢字を使ふ人はほとんどおなくなつた。しかし個別的に本字が使はれる漢字がある。代表的なのは、「蟬」であらうか。他には「摑」「螢」「蠅」などがよく使はれる。わたしは少数派で肩身が狭くなつてきた。

MS・DOSの時代は使へる漢字が少なかった。俳句で頻繁に使はれる「榎櫃」の櫃には苦労した。その頃は漢字は24の升目で作られてゐた。「櫃」の字を使ひ「櫃」を作るのである。それ用のソフトもあつた。「蟬」「玫瑰」なども作つたがいつも形が悪く気に入らなかつた。しかし今は楽になつた。題詠しりいずの「橋」など橋・橋・橋・橋と使へる時代だ。その気になればまだまだ橋は異体字があるさうだ。旧字体は姿が美しいので俳句では使つてゆきたいと思つてゐる。

☆

須賀敏子

埼玉

炎天の赤い釣竿白い腹

山形の西瓜ぎつくり地球喰ひ

ほつほつと金柑の花咲いて散る

山よりもデモに参加と夏帽子

炎暑の日「生き延びましょ」とジムの友

「ガラケーなの」スマホの君よ心太

藍浴衣解いて帽子とワンピース

はるかな波の うたにあけ
のぼって青い 海の日を
大きな声で 呼んでいる
ころんで起きて 元氣よく
海の子 波の子 明るい子

茨城県大洗町立祝町小学校の校歌
一番。創立は明治七年（一八七四）
と古く、母も卒業している。大洗町
の北部に在り、校庭の前の松林を抜
けると広い広い太平洋に出る。在校
生の頃、授業中に先生と共に海で遊
んだ記憶がある。しかし校歌の記憶
が全く無いのでインターネットで調
べてみると制定は昭和四十五年で、
私はそれ以前に卒業している。の
んびりとした思い出の祝町小学校も、
平成二十四年磯浜小学校と統合して
大洗町立大洗小学校となった。

☆

竹内弘子

埼玉

小説の結末に似て金魚玉

熱帯魚越しに目が合ひそれきりに

七月のえごの葉裏の白きこと

石仏の頬ゆるみたる夕立ちかな

じゃんけんの石に負け越し梅雨籠

落雷や箴言石に刻みたる

石噛る程の意地なし蝸牛



鬱

田中藤穂

東京

満満と鬱湛へをり梅雨の川

七夕竹バタ足の出来ますやうに

新盆の座敷灯りて人声す

岐阜提灯かすかに揺する夜の風

あぢさみの丘煌めかせ海へ陽は

夏燕友の墓ある海の街

あれよあれよと政情・五輪梅雨ふかし

老人が骨折するのは洋の東西を問わないうらい。ブッシュ元米大統領（91）が自宅で転倒、首の骨を折ったと。頸椎を骨折したが神経障害はないとの事だ。患部が動かぬ様器具をつけ病院で自然治癒を待つとの事。

一方自動車のF1シリーズ日本グランプリで頭部を負傷したジュール・ビアンキ選手は、一二十五才の若さで死去したと同じ日の新聞で報じられている。本当に人生は様々である。今日は「海の日」颱風は一応去ったが色々な事件事故の報が絶え間ない。

生命ある人は今日の一日を大切に明かるく慎重に生きるのが、いいのかなと、老体の自分に言いきかせています。

二〇一五・七・二〇 記

遠花火

長崎桂子

三重

紫陽花や雨後に紅いろ仄めかす

嘆き悔い笑ひし友や額の花

辺り一面青あをあをの早苗かな

梅雨晴や歌謡舞踊の朴と品

梅雨晴間掘れば名もなき虫元氣

行交ひの奇声だみ声遠花火

二階窓綺羅綺羅の降る遠花火

毎年の事だが梅雨入りしてから三週間を過ぎる頃から、家全体に湿度の高さ故と思うが、湿っぽい匂いが漂っている気がします。

此の季節は日本列島の何処かで、突風落雷竜巻大雨洪水と災害が起ります。今年には火山の噴火もあり、大きな被害にならない様にと、ひたすら祈るのみです。

そして太陽が顔を出してくれた日は、喜びと忙しさで夕方には、すっかり疲れております。

そんな時スーパーへ買物に出かけて、切花の売場で花の香りをあれこれ嗅ぎながら、玄関の一輪挿しに今日ほどの香りにしようかと、暫く時間を費やして居ります。

日 雷

森

理

和

東京

七夕に抱へる程の青い花

カフェに這ふ蜥蜴を外へ浜へ出す

翡翠の思ひもよらぬ裏の川

合歓の花小舟いつしか闇の中

合歓の花芭蕉は西施水平線

走行の列車で花火浜浮かぶ

母縫ひし浴衣を孫にお薬師さん



☆

赤座典子

東京

立葵揃ひの水筒大きかり

新聞紙丸めて並ぶ西瓜割

炎昼に長靴如雨露並びをり

名を付けむ我家の一員墓

中吊りに気になるドラマ秋隣

観客の声無く帰る路灼くる

恙なく夕餉の支度日雷

沖繩を初めて訪れた時、基地の占める大きさに衝撃を受けた。その後強くて明るい人々に惹かれて沖繩が大好きになった。その大変さを何も分かっていないままであったが。

先日「うりずんの雨」というドキュメンタリー映画を見た。語り手で監督がアメリカ人というのも意外であった。4月のアメリカ軍の侵攻から8月15日までの記録映像と、生存者の証言、基地に対する様々な意見等を含む2時間半。自分が如何に何も知らないか、沖繩の人々の犠牲を踏み台にして如何に呑気に暮らしているかを思い知らされた。

もどかしく、申し訳ないながら、沖繩の小学1年生の詩を基にした「へいわってすてきだね」という絵本を購入した。我が家で代々読んでもらうために。ほんの少し、今のところ出来たことである。

思ひ出になつてゆく 秋川

泉
埼玉

夏座敷ポツリと置かる黒電話

蛇の眼とみまごう蛩闇夜かな

闇おりて西瓜畑に動く影

夏の夜明け深深とした気の流れ

かけ廻る子らより高き帚草

日盛りの歩み遅れて影をふむ

リブ口閉店急ぎゆく道蟬しぐれ

池袋西武デパートの地下にあつた書店『リブ口』が、本日閉店と七月二十日午後、ラジオ番組で知つた。私にとり大切な本屋であつた。夕飯の支度をそのままに、急ぐ心で池袋へ。何か記念にと迷つて、絵本『ごんぎつね』（新美南吉作・黒井健絵）を求めた。『ごんぎつね』の話は、人間の性のそのどうにもならない哀しみが語られていると思う。私は、人前で涙をポロポロこぼしそうになるので、この物語を今まで手にする事が出来なかつた。そして、その日『リブ口閉店』の淋しさもあつて記念に求めた。読むたびに、この「ごん」と云う狐が私自身であつたり、「兵十」が私自身であつたりする。黒井健の詩情あふれる美しい世界が涙をさそう。いつ読んでも心にあふれて来るものがある。

梅雨晴間

井上石動

山梨

あぢさゐや水音早き隠れ沢

筒鳥の呼び音途切れず雨催

ひぐらしの一啼けふの終りたり

銀盃をキンキンにして麦酒の夜

麓より削れり夏のモンブラン

あぢさゐやけふの庵主は朝帰り

隣家の反射光入る暑さかな

私の句会は、吟行大繁盛。

6月には、近隣の山深くに在する「野草料理を供する庵」にて。野草料理を食し、庵主も句会に特別参加。

8月は、あの「笹子トンネル」入口に在る「予約客専門の食事処」にて。どちらも、我々とご縁のあるご亭主ゆえ、破格のお値段にて。6月には夏の草花であったのが、8月には秋の草花に変わっていた。吟行は、晴・雨・雪・風・槍、なんでもOK。これが吟行の利点ですよ。8月の会は、特に旨い日本酒も出してくれるので、私は運転代行まで予約。旨い酒・料理、いい仲間……で、豊かな一日となった。

で、吟行句の出来……ですか？
酒がいけなかった！

☆

王

暮れ残る山影黒き湖畔かな

芒より日の落かかる旅路かな

富士黒し野原の芒靡きをり

稲の香や世の隅々に遍はる

波立たぬ旅路と祈る空高し

吾が生や涯りあるとぞ時計草

ほのぼのと漏れる灯影の蔦青し

愛知 岩



☆

齊藤裕子

東京

板の間に猫裏返る扇風機

早起きの畦にゐる父露涼し

母を呼ぶ声渡りゆく青田かな

プール掃除買つて出る子等じゃんけんぼん

浮輪吹き頬つぺ膨らむ幼かな

戴いて朝な夕なに西瓜かな

真上から子等が見て取る切り西瓜

7月30日、2年振りにまたサントリーホールに立つことができた。大友直人指揮、東京交響楽団のオーケストラで、千住明作曲、黛まどか台本のオペラ「万葉集 二上山挽歌編」を演奏会形式で歌った。ソリスト4名に、女性約15名、男性60名の混声合唱。1年かけての練習、暑い中でのオケ合わせ。本番にたつには、体調管理にとても気を遣う。私も抗癌剤治療を10日間延ばしてもらって本番にたつことができた。病気の事を知って、応援してくれる仲間がいた。本番に一緒に立とうねと励まし見守ってくれた。コンサートが無事に終わり、皆で肩を抱き合って喜んだ。コンサートの翌日は、抗癌剤治療の日だった。治療前の血液検査の値が心配だったが、白血球数も好中球数も回復していて、治療を受けることができた。6時間の点滴治療は、前日のコンサートの疲れもあって、ひたすら眠りながらの治療となった。7月は忙しい月だったが、充実した月だった。病氣と闘いながらも、幸せだなと感じている。

☆

佐藤 恭子

東京

熊ん蜂袋小路にふつと消ゆ

羽衣のやうな五歳の更衣

暮れ色に百日紅の根元から

ヤブデマリの赤い実葉の上水の上

夏落葉行く処さだめず蜘蛛の巣に

浮島に昼寝うながす鴨に微風

蜘蛛の巣の七色八いろ雨の露

日常の食品は生協で購入している。特にお米は佐渡のコシヒカリを食べている。平成28年の月佐渡市は世界農業遺産に登録されたそうだ。佐渡のお米を買っているのは、朱鷺への取り組みに少しでも協力できたらと思つてのことだ。朱鷺を野生で暮らせるようになるには私達ではなかなか出来ない。それには専門に関わつてくださる方に何が出来るか。生協で扱われる佐渡のお米を買うと少し募金ができることを知り、それ以後佐渡のお米、朱鷺と暮らす郷というコシヒカリを食している。このまえ、野性で朱鷺の繁殖がテレビに映し出された時は、嬉しさというよりなんとも言われぬ思いであつた。これからも続ける。

☆

篠田純子

東京

もも色の提灯連ね涼舟

西瓜の種もノンポリでみられない

日傘閉づ時軽き爆発音のあり

スカイツリーの見えぬ狼狽朝曇

デモ隊への野党議員の拍手涼し

デモへの励ましブルームーンと法師蝉

葱のこ草指無き鳩の動かざる

六十年安保の時の私はまだ子供で
樺美智子さんが国会議事堂前のデモ
で亡くなった。父のスクーターに乗
せてもらい二人でデモを見にいった。
議事堂前の坂は、怖いくらい人で
いっぱいだった。七十年安保の頃は
東大紛争で、大騒ぎだった。知合い
の大学生はノンポリは表向きで、蒲
田闘争のアジのピラ作りに関わって
いた。私の父は運送業を営んでいて、
従業員が逮捕された。明治大学の二
部の学生で、店のトラックで何かを
運んだらしい。神田警察に差入れに
行ったら、ミニスカートの女が来た
と、反感をかったらしい。何故が大
物と勘違いされ釈放までには時間か
かった。

七月三十一日永田町駅から参議院
衆議院、議事堂前までデモ行進に参
加した。ノンポリではいられない。

セメントサイロ 定梶じょう

石川

ででむしや義をみてせざることも多く

朝ぐもり収集車にごみ入る入る

一軒家さびしくて吊る青簾

祭果てたり潮さゐがよみがへる

梅雨明けぬ金沢駅の朝雀

梅雨明けぬ歳時記買ひ換へようと思ふ

街なかのセメントサイロ雲の峰

当地元紙の句会報欄に〈探しあぐ宿見ゆ安堵灯涼し〉が紹介されてあった。文法上『探しあぐる。宿見ゆる。安堵』俳句的には〈探しあぐる宿見え安堵灯涼し〉であろうか。『ホトトギス』系の会の句である。

一般に、高浜家二代の年男が主宰の頃はこんな誤りはめだたなかった。甚だしくなつたのは三代目稻畑汀子さん以後。指摘する人が居ないから、「てにをは」が間違つていゝ、とは夢にも思っていない。従つて弟子孫弟子達が轍をふんで当然なのだ。

汀子さん編集の『ホトトギス』歳時記の例句に〈云はむとす事ふと忘れ涼風に〉が採られていて、「勉強すること」とは言うが「勉強すること」とはいえないことを忘れてゐる。

八月作品より

齊藤裕子・佐藤喜孝

けふもまた別れて出會ふ梅雨の妻

佐藤 喜孝

いつも当り前だと思つてゐる日常の事が、実はとても有難い幸せな事。梅雨の日に作者が感じた幸せ。作者が出掛けて帰つて来るといふより、この句は、奥様が出掛けて帰つて来ると解釈しました。「けふもまた」に作者の感慨が込められていると思います。奥様の傘をうつ雨音や、靴音が玄関に近づいてくる。

「ただいまー。」明るい声が玄関に響き、作者は今日もまた、「おかえり。」といつも通りにを答えました。
(裕子)

夏葱のへし折られたる前籠に

佐藤 喜孝

自転車の前籠に、夏葱を入れて走つて行く主

婦を想像しました。緑の葉の部分が細くて長い夏葱は、籠の中に収まりきれずはみ出してしまします。白葱や、長いままの牛蒡、蒨等は、八百屋さんに半分につけて貰うこともあるでしょうが、夏葱は切らずにそのままの姿で持ち帰りたいものです。しかし入れてはみたものの、立派な長い夏葱はやはり困り物、到頭へし折られてご帰還することになったのでしょうか。夏葱が「前籠に」へし折られたのではなく、買主主にへし折られた夏葱が「前籠に」入っていると解釈したのですが……。 「折られたる」の「た」は文法的にどのように解釈すればいいのか、不勉強でお叱りを受けそうですが、お教えいたければ幸いです。
(裕子)

袋掛遠きサイレン正午なり

定梶じょう

俳句を始めて2年位の頃、「十二時のサイレン響く植田かな」という句を作ったことがありました。三人の方が採って下さったのですが、サイレンはどうしても空襲警報を思い出させるという人が多かったのを思い出します。私が育った鹿児島県の田舎では、村の小高い丘に設置されたサイレンが正午と三時、五時に大きく響き渡り、皆に時間を知らせてくれるのでした。殆どの家が農業ということもあって、野良に出て農作業をしている村人はそれを頼りにしていたのだと思います。空襲警報を知らない私は、サイレンを時報として育ち、暗いイメージがなかったので吃驚したのを覚えています。この句も、果樹園のある田舎の情景が詠まれています。桃、梨、あるいは葡萄に袋掛けしている。遠く

で正午を知らせるサイレンが響いている。一生懸命袋掛けしていた人達が、「ああー、もう十二時だ。」と仕事の手を止める。サイレンの句を作らなくなった私には、広々とした田舎の情景が浮かび、懐かしい思いの句でした。(裕子)

釣銭の魚くさく走り梅雨

竹内弘子

作者が面白い物したのはスーパーではなく、漁港近くの海産物屋さん、あるいは個人商店だと思いました。威勢のいいおじさんが、店先に吊るしてある小銭の入った籠から、濡れた手を前掛けでちよつと拭いて、大きな声で「まいど、ありいー!」と渡してくれた釣銭。「走り梅雨」の頃の生暖かい空気と湿気が、釣銭についた魚くさい臭いをいつそう強く感じさせたのかも知れません。どんな事でも句にしてみようという作者の心意気、見倣いたいものです。(裕子)

青梅やふと舅姑ぢぢははを恋ふる日も

田中藤穂

作者はご主人のご両親と一緒に暮らしていらしたのでしよう。「ちちはは」と振られたルビに、作者の様々な思いを感じました。一緒に暮らす日々の中には、楽しい事ばかりではなかった筈。しかし、作者は庭の青梅を見ていて、亡くなられた「舅姑」を思い出しふと懐かしい気持ちになった。たつぷりと育った青梅に、作者と舅姑さんの色んな出来事や思い出が詰まっているような気がします。長年、舅姑と暮らした私にはとても共感出来る句でした。(裕子)

露草やコンビニの朝始まれる

井上石動

露草は一見優しげに見えるが、繁殖力のある草のやうである。石の間のわずかな隙間から茎葉を広げてゐる。町の個人商店が後継者難、経

営難からつぎつぎに消えていった。閉店に力をかしたのは一つにコンビニがある。今はコンビニ同士で戦いで鎬を削つてゐる。どこの町でもコンビニは24時間開いてゐる。連続して開いてみた店にも朝が来る。店内は一年中明るいので夜明けの明るさで朝を知るとは思へない。きつと商品の配達が来たのであらう。店の前のちよつとした土に場所を得た螢草が咲きはじめた。(喜孝)

粽解くその手の白さはらかき

王 岩

粽を解いているのは、奥様でしょうか、それとも作者の幼き頃のお母様でしょうか？いずれにしても、慈愛に満ちた母親が、幼い我が子に食べさせようと粽を解いている。その手を見つめる作者がいる。「その手の白さはらかき」というフレーズに、その手を見ているのが、子

供の時の作者であっても、大人になって奥様を見つめている作者であっても、とても愛に溢れた眼差しを感じます。勿論我が子の成長を願う母の愛も表しているのだと思います。(裕子)

いつからか坂で一息蝉時雨

大日向幸江

前月号で「両の手に持ちきれぬ程夏野菜」という元気な句を詠まれた幸江さん。以前は休まず一氣にその坂を登っていらしたのです。しかし、蝉時雨を聞きながら、その坂の途中で一息ついていてご自分に気がついた。いつ頃からだろう、この坂で一息つくようになったのは。ちよつと体力の衰えに気づかされてしまった。今年になって私の母が車の免許を返上した事もあって、「免許返上とぼとぼ歩く夏が来た」と、8月号の作品に、ちよつと弱気な幸江さんもみえて、お会いした事のない方なのに気になりま

した。暑い蝉時雨の時期、坂道で一息つくのは誰でも普通の事。今までの幸江さんが元氣過ぎたのでしよう。暑い夏も今暫くの辛抱。涼しくなったら、また精力的にあちこち出掛けて、楽しい句を沢山詠んで下さい。(裕子)

梔子のつぼみ翡翠の縞模様

斉藤裕子

写生句を作るのは俳句を作る楽しみの一つである。しかし意図して草木虫魚に向合つても出来るものではない。作るといふより授るといふ方がふさはしい。この句は答の美しさをありありと捉へてゐる。時々俳句の神さまはご褒美をくれる。(喜孝)

七変化どないすんねんこの憲法

佐藤恭子

日本語とは摩訶不思議な言語らしい。憲法も読む人によつて意味が異なる。今国会も憲法を読み方を變へて改憲したのと同じやうな意味合いにしよう

云ふことらしい。「七変化」幹旋の善し悪しはともかく不慣れな大阪弁を使って現状を憂ひ・又は茶化してゐる。とにかく云はなければ済まぬ作者である。(喜孝)

潮引くや鳥居主春夏の月

長崎 桂子

今夏、桂子さんは厳島神社に杖を曳かれたやうだ。感動なされたやうでその心もちを特別作品にされた。それぞれ感動に溺れず的確な表現の句になつてゐる。「夕南風波白くして社殿打つ」姿もよいが、全容を表した大鳥居の上に夏の月が掛つてゐる。静かで厳かな光景である。(喜孝)

よくあるさー台風一過道を掃く

須賀 敏子

慶良間・八重山と島を堪能されたやうだ。橋に寝て星座を眺め、絞らたてのサトウキビジュースをの

み、アカシヨウビンの特徴のある鳴声をこころに書きとめた。アカシヨウビンといへば思ひ出した事がある。山歩きをしてゐて聴く鳥の名前を知りたくてレコードを買った。たしか25cmのLPだったと思ふ。鶯やホトトギスはすぐ分つてよいのだが、三光鳥黒鶇などは分らず仕舞であつた。アカシヨウビンは全く別物の鳴き方で一度生で聴きたいと思つて今になつてしまった。

「よくあるさー」は沖繩弁の雰囲気伝へてゐる。台風になれた沖繩の台風感を伝へてゐる。台風は道も空も綺麗に掃ききよめてくれる。「よくあるさー」で句が生き生きとなつた。(喜孝)



前月抄

旅人のやうに醒めたる春の雪	佐藤喜孝
らつきよ漬ける夢みて寢覚さびしめり	定梶じょう
山崩し続くダンプや雲の峰	須賀敏子
釣銭の魚くさくて走り梅雨	竹内弘子
青梅やふと舅姑を恋ふる日も	田中藤穂
青時 雨 草木新し 美術館	長崎桂子
魚の群る橋の袂に合歡の花	森 理和
気負ひ無きよはひとり柿の花	山莊慶子
雨上がりししづく重たげ杜若	赤座典子
梅雨の月うすずみ色に野も山も	秋川 泉



夏潮の透き通る朝巖島	々々	潮引くや鳥居全容夏の月	長崎桂子	よくあるさー台風一過道を掃く	々々	橋に寝て星座あれこれ薄暑かな	須賀敏子	金魚を繁殖させて青年恋もせず	篠田純子	七変化どないすんねんこの憲法	佐藤恭子	梶子のつぼみ翡翠の縞模様	斉藤裕子	免許返上とぼとぼ歩く夏が来た	大日向幸江	うら悲し物音もせぬ遠火花	王岩	露草やコンビニの朝始まれる	井上石動
------------	----	-------------	------	----------------	----	----------------	------	----------------	------	----------------	------	--------------	------	----------------	-------	--------------	----	---------------	------

喜孝 抄



ういま



比来披見

沖 八月号

蜘蛛の罫に雨滴つつみの撓みかな 能村 研三

雨月 八月号

ひと晩の土砂降りありて梅雨に入る 大橋 暁

槐 八月号

仮の世の仮にはあらず原爆忌 高橋 将夫

風土 八月号

まばたきて一・二・三・四さくらんぼ 神蔵 器

京鹿子 八月号

あぢさゐのひぐれの雨となりあたり 豊田 都峰

六花 八月号

難産の蝉なる桑の真昼かな 山田 六甲

鳴 八月号

若葉風最晩年をよぎりたる 井上 信子

末黒野 八月号

押し移る雲の量感夏来る 松本三千夫

万象 八月号

ひなげしの茎の細さが気になりぬ 大坪 景章

峰 八月号

跳ねるもの翔ぶもの見えず草いきれ 布川 直幸



春燈 八月号

潮入の堰高だかと薄暑かな 安立 公彦

集 Z 56号

寒雀一羽降り来てみんな地に 大山 夏子

雲の峰 八月号

梅雨一と日間違ひ電話受けしのみ 朝妻 力

萱 九月号

衣擦れの音させ宵待花ひらく 木村 嘉男

嫌になるほど老いて重たき梅雨の傘 亀田虎童子

戦争のはじまりさうな瓜の花 小島 良子

船団 一〇五号

家に壁人間に皮春うらら 坪内 稔典

啓蟄やATMにコロツケと 平 きみえ

木枯の果は最終処分場 知念 哲庵

建国の日や亡国の汚染水 々 々

去年今年メルトダウンの制御棒 々 々

毎日毎日毎日夏で朝ごはん 中原 幸子

帰るのは火鉢のよこの母の前 梨地ことこ

滯 九月号

ひろがる青田農夫一人がしかと立つ 松林 尚志

合掌を解かんと蓮の蕾かな 藤田 宏

佐藤喜孝

俳境流連

櫨紅葉朝日に映ゆる夜の雨
風の息深くして散る櫨紅葉

桂子

家の前の市道は櫨の並木で、交通量は多く従って、塵や砂埃はとも多く舞い上り、一日中騒々しい我家の周辺です。

前日から激しく降り暁方に雨が上った時、此の通りの櫨紅葉の可成り紅葉した葉は、前夜の雨がきれいに洗ひ落し流して、土くれはみじんも付いていないからとても美しく、朝日が照り付けているのできらきらとした、素晴らしい美の景観の道路を暫く楽しませてくれます。と言いますのも雨の後には必ずと言っていい強い風の吹く日がやってきます。

強い西風を吹く鬼に例えました。夕方からの強風は一晩で大方の葉が散り落ち、溝が埋まりました。その夜の大雨の水捌けが悪くなり、道路は水浸しで、市の職員と地区の人は総出で、道路の大掃除となり、大変な一日になった事がありました。

鑄掛屋の遠くに居りし日向ぼこ じょう

『あを』誌へ投稿したのだから、比較的新しい句のようだが、実は古い。むかしの句帳にあったものなのです。

その頃に、句歴数十年を閲する人々が集まってつくった句会。ですから今健在なのは、私がよく名前をのぼせる句寿夫さんともう一人と、そして私だけ。結成当時の三十年ほど前には十数人が出席していたのでした。

鑄掛屋ももう見なくなったなア、という話から弾

んで、日向ぼつこに触発されて目前にあたかも鏝掛屋さんが居るような、というような評を貰ったのでした。

「き(し)」は、日本語学の大野晋さんによると、「昔こういうことがあつたことをはつきりと記憶している」という時に遣つた助動詞であり、同じく山口明穂さんは、平安末期以降ことに室町期には、「き(し)」は過去の意味を失つて文語体にしたと思う時に遣つた、と説明しています。それと共に、「き」が終止形の座を失い、連体形である筈の「し」が終止形になつてくるわけです。ですから現代の俳句で、「し」を遣つて過去の場でないのはおかしい、誤りである、と、仰有るかたがあるのは、そのほうがおかしい。どうして平安時代の意味でのみ使う必要があるのか、そのことを説明すべき。

もつとも、冬日向に居て、昔々すこし離れた処に鏝掛屋さんが居たのをはつきりと記憶している、と読んでくれたらもつと嬉しい。

戦争のはじめはいつも海鼠かな 喜孝

海鼠は好物ではないが、近頃はすこし食べられるやうになつた。大体において酢の物は苦手、焼餃子はラー油も酢も使はず生醬油で食べる。「いきながら一つに冰る海鼠哉 芭蕉」と写実派の句があるかと思ふと「憂きことを海月に語る海鼠かな 召波」と童話的な句もある。近代になると「心臓と同じくらゐの海鼠かな 八束」「われよりも年寄る海鼠食ひにけり 渚男」とおのれと海鼠を比べてみる人があつた。「階段が無くて海鼠の日暮かな 閒石」となる。と海鼠らしい句だなあと云ふしかない。

古い話だが、お客さんに新宿で日本料理屋さんを開いてゐた方がをられた。買ったが使へないからと大きな大きな桂の俎を頂いた。わたしも使ひ道が無くそのまま仕事場に立てかけてある。ある日その店に家族して出かけた。飲食してゐるとお品書に「このわた」とあつた。わたしは鱈の白子が大好きなの

で良いものを見つけたと早速注文した。どんな料理で出てくるか楽しみにしてみると、運ばれてきたのは小さな壺一つであった。蓋を開けると見た事も無い代物が入ってゐた。どうも不相応な店にはゆかぬ方がよい。

海鼠には申訳ないが戦争など何時始つたか、何時終つたかなど不明なものであらう。わたしにはまだ続いてゐる面もあるやうだし、もうはじまつてゐるのかも知れないとおもふ。をはりよりはじめの方が海鼠に近いかなと思つて作つた。理屈っぽい広がりのない句である。

子の冬日妻に冬日の少し違ふ

じょう

説明しなければ判つて頂けない、というのは俳句としては愚の骨頂、あるいは駄目な俳句の見本、ではあります、少しこの句について説明させてくだ

さい。

此の句、「子の冬日妻に冬日」で切れるのです。いや、切つて読んで下さい。要するに、「の」に段差があつてそのあと「少し違ふ」が続く、ということ。「俳句は形」ということがあります。「や」と「かな」を一句中に同時に取り込むのは不可、なんていうのも「形」でしようし、切字や休止を句中のどこかに欲しい、というのもさうでしょう。「形」とは、言つてみれば鑑賞する側の欲求規準でもあるわけですから、掲げた拙句は、「の」で切れます、切つて下さい、とお願ひしなければ先ず切る人はいないでしょう。それでもこの型で投句した、については、百人にひとり千人にひとりでも分かつてくれる人があるかも、という希望から、なのでした。読み手の欲求規準に合致しながら佳句をつくることの難しさ、から逃避した句だ、と非難されてもしょうがないのですが。

足裏に活断層や田水沸く

幸江

今朝も、炊きたての白飯、その他好きな和食に合う御菜で、一日の始まりを満足一杯で終わった。

こんな幸せをもたらす米の国、それなのに少し前活断層が美味な米の出来るこの辺りを走っているとの発表、どうして、恐ろしい発表をしたのでしょうか。私も他の友人達も、暫く言葉には出さないがお米大好き人間、少しもいい考えは浮かばないが取り合えず今のうち美味なご飯を出来るだけ食べておこう。きつと私が思ったことは他の人も思っているかも。

歩成りてあばれ兆すや終戦日

恭子

終戦のとき自分はもうどうしていたかは記憶にない。四歳にもうすぐなる頃だ。全く記憶にないということとは、記憶に残る物事が三歳の子にはないほどだったのだらう。と思う。しかしその前のことははつき

り覚えている。空襲警報のサイレンがなると、教えられていた通りに押入れの中に入って布団をかぶることだった。鶏に餌をやっているも警報がなると小さいながらも家に飛び込んできて押し入れに入った。そばに大人がいなくともそれだけはちゃんと出来た。今思えば戦争って何なのか分かっていただけだろうか。解らないながらも言う事を聞かないといけないことだけは、雰囲気でわかったのだろう。父が居ないので、祖父母の言うことはちゃんと聞いていたようだ。その頃に祖母がやっていた繭の糸繰などを見たことは今でも忘れてはいない。

また祖父のやっていた紳士服の仕立てで使っていたアイロン、炭を起こして後ろから入れて使っていた、など。その頃の母のことはミシンを踏んでいたことだけは覚えている。銀座で洋裁店を友達とやっていたことは直接母から聞いたことはない。そんな戦争もいつの間にか終わったと言うのが実感だ。三春に疎開していたせいだと思う。父が帰り新潟の親

戚をたより新潟の繁華街に店を構えた。

小学校に通う頃から父の弟が戦死をし、父ちゃんが中国に行っていたときに鉄砲の弾が耳の下をかすったこと少しづつ話をする父を見て争いはいけないうと思うようになったようだ。と確かな記憶はないが、その頃から戦争という言葉が耳底に残っていたようだ。我々庶民にとつて、(戦争で位に名前がのっかっている人以外)敗戦ではない。戦争に負けようが勝とうが逃げ惑っていた人々にとつてこの戦いは終戦である。終戦何ものでもない。敗戦などと言っている人々は、また戦というものが心の底で勝つ戦ならもう一度やろうかと自分が気がつかないうちに思っている方々ではないだろうか。毎日を必死に生きているものにとつて勝ち負けはどうでもいいのだ。争いなどない静かな暮らしを望んでいた。須磨子さんからも、喜孝からも東京の凄まじい様子を聞き益々私の戦争に対する考えは固まっていた。子供の手を引いて逃げ惑っていたことなど今の若い

人々は考えもつかないことだろう。戦さの火の粉を被るなどとは想像外だろうと思う。そんな戦争も終わった。戦が終わった。終戦なのだ。起伏があったが、七十年貧しいながらも穏やかに暮らすことができた。……。どこの国も終戦になつて欲しい。今戦っている国々よ!!!。特別な人を除いて一般庶民の願いは穏やかな気持ちでいられることだと思う。今日も又、お花の水やり猫のトイレの始末等自分に課せられた仕事以外は二十四時間大事に過ごそう。

将棋の歩の様に動かされていても、動いても穏やかに過ごしているがいざ成り歩のように思わぬ力を得た時になんでも出来てしまうのだと勘違いをしてしまう。その勘違いが恐ろしいことに発展してしまう。終戦のとき味わった心持ちを大事にしていきたい。一般庶民はそう思っていると!!

あをキーワード俳句辞典 (こうりゅう)

航空

冬日和目線をよぎる航空機
十二月の航空公園相思鳥

芝宮須磨子
須賀 敏子

高校

眞白な開襟シャツの高校生
早稲も刈る三味線も合奏高校生
夏の夢今走り出す高校児
高校の始業放送九月かな

長崎 桂子
藤野 寿子
森山のりこ
大日向幸江

孝行

親不孝孝行のをり柿青し

森 理和

煌々

煌々と冬木の間の男子寮

竹内 弘子

交差

カッコーが棲む交差点夏は来ぬ
街暑し交差点ゆく盲導犬
短日やスクランブルの交差点

佐藤 喜孝
早崎 泰江
芝 尚子

格子

燈火点く鉄格子窓冬めける

夏つばめ帳場格子の蔵の町

足下は霧槍ヶ岳へ取り付く鉄格子

爽やかや格子戸から出る運動靴

丹念に格子拭きあげ花八手

峠より秋の水来る宿格子

格子戸にからまりて果つ冬の草

京すだれ路地の格子戸櫺子窓

一鉢より伸びたる鉄線窓格子

出立は弁慶格子夏祭

螢草縁切寺の黒格子

山莊 慶子

後藤 志づ

篠田 純子

吉弘 恭子

篠田 純子

渡邊 友七

長崎 桂子

森 理和

斉藤 裕子

篠田 純子

田中 藤穂

若人の皓齒そろひぬ芸術祭

皓齒

田中 藤穂

甲子園

夏水頭に甲子園応援団

ロボットの行進夏の甲子園

校舎

入場料の要る旧校舎さへづれり

長崎 桂子

須賀 敏子

堀内 一郎

講習

フワアレンジメントの講習終へて桜餅
親子して手廻し発電夏期講習
篠田 純子
藤野 寿子

公衆

黄落や公衆電話硝子箱
電話器無き公衆でんわ走り梅雨
森 理和
篠田 純子

甲州

甲州市笛吹市山笑ひけり
甲州のボジョレーヌーボー友来る
堀内 一郎
芝宮須磨子
眞夏日や甲州辯が朝ドラに
芝宮須磨子

交渉

さはやかや我に団体交渉権
篠田 純子

校正

校正の朱筆きさらぎ太く引く
定梶じよう

後世

前生も後世もうやむや蓮枯るる
田中 藤穂

香草

香草を風呂に浮かべる寒の内
香草を取らむするや蟻蛸とぶ
長崎 桂子
竹内 弘子

高層

大夕焼高層ビルを画布として
高層のホテルの間に草の花
高層のガラスしたたる春夕焼
夏空につきささりをり高層ビル
須賀 敏子
高層の灯りそれぞれ盆三日
石路の花高層ビルの車寄せ
高層ビル水にゆらいで涼み舟
鎌倉喜久恵
鱗雲ぜんぶ写して高層ビル
吉成美代子

高速

高速路両壁の画布蔦紅葉
物の芽の野辺を横切る高速道
夕立や高速道を二分せり
春尽きてバスや高速京都行
渋滞の高速道の夾竹桃
松本 米子
芝 尚子
赤座 典子
定梶じよう
芝宮須磨子

津波後のバスは灯を入れなほ走る

繩文村へ入る徑は木しづくに

繩文の戸口すずしき風を吹く

繩文人の歩いた起伏バツタ飛ぶ

繩文や艸木のやうな一代なり

繩文の塔高く組み陽を支ふ

繩文の家に聲かけ顔入れる

繩文のA氏あゆめる秋日差

秋草の丈にきそへる草の家

秋風のごんごん溜る藁の家

秋草香る縄文の村人口零

前山に雲うすくあり秋の家

天高し土偶に乳首付けし人

人去りて遺跡は秋のこゑに満つ

徑てふさびしきがあり縄文秋

林中秋卒然とまた忽然と

此処で待つ錆びし鐵路とまたたびと

刈りをへて田は三角に山田線

縄文村
佐藤喜孝

毎月25日発売
定価1200円(税込)

月刊

俳句界

2015年

10

月号

あらためて読みたい

短篇小説く小説と俳句

太宰治 「桜桃」く桜桃忌と俳句

夢野久作 「きのこ会議」く茸と俳句

小泉八雲 「停車場にて」く駅と俳句

クラピア 俳句界NOW 柏原眠雨

特別作品21句 岡田史乃

※セレクション結社「水明」星野光二

私の一冊 榎本バソソ了巻

夜長に飲みたい酒

く酒好き、俳句好きの文化人、俳人が
すすめる酒と、酒を愛する一句を披露!

椎名誠 森村誠一 吉田類 富士真奈美

茨木和生 稲畑廣太郎 星野高士

伊藤伊那男 大野崇文

辻桃子対談くこの人に聞きたい 檀 太郎

●お邪魔します 書齋訪問 加古宗也「若竹」

魅惑の俳人 藤田湘子

佐高信の甘口でコンニチハ!

古今亭菊之丞 (落語家)

別冊 投稿俳句界 一流選者28名!
日本一充実の投稿欄



※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

あとがき

あの酷暑も終ってしまふと懐かしい気がする。勝手なものだ。

題詠しりいず「橋」は七名の参加者があり限定七部として無事発行致しました。

次回は「雨」です。

締切りは十月末日

30句以上

参加費 五百円

で募集致します。ご参加お待ちしております。

二〇一五年九月号

発行日

九月五日

発行所

東京都中野区中央2-50-3

電話

090-9828-4244

ファックス

03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/須賀忠男・松村美智子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

郵便振替

00130655526 (あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

